次の文章は、眞島めいり『文通小説』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※　設問の都合により、本文の一部に改変があります。

また、本文をⅠ～Ⅲに区切ってあります。

中学二年三学期の終業式の日、能瀬ちさとは、大親友の平貴緒から他県に引っ越しすることを聞かされ衝撃を受ける。貴緒はスマートフォンではなく「これからは文通しようよ」とちさとに提案し、貴緒は得意な絵を、ちさとは文章を送り合う文通が始まった。中学三年の八月三十一日、高校進学への進路がまだはっきりしないちさとは、貴緒と地元の中学校の前で久しぶりに再会し進路について話を始める。

Ⅰ

「進路ね、……ちゃんと話さなきゃだめだってわかってたんだけど」

つぶやいて、白く塗られた警告プレートの表面を指の①**カンセツ**で軽く叩く。コンッ、と硬い音がした。

「夏休みも終わるのに。だらだら引っぱっちゃって、ごめん」

ごめんなんて言わなくていいよって、わたしは笑った。でも口角は中途半端な位置までしかあがらなかった。

顔の筋肉の動きがぎこちない。頭の中で疑問が一気に膨らむ。「ごめん」？　貴緒は何に対して謝っているんだろう。(1)その疑問は不安に変わって、次にはほとんど恐怖になった。

何かを聞かされる。

何か、よくないことを。直感が叫んでいる。

「時間切れ。やっと決心ついた」

貴緒がまっすぐわたしを見た。Tシャツの襟からのぞく鎖骨に、汗の粒がじわり浮いている。

こんなに近くにいるのに。

やっと会いにきてくれたのに。大事な友達なのに。どうしてわたしは、ここまでおびえてるんだろう。

わたしは。

わたしは、中一のときからずっと、貴緒をたいせつに思っていて……。

「あたし、美術科のある高校に行く。それで美大をめざす」

貴緒の瞳は怖いほどまっすぐで、ちっとも揺らがなかった。

わたしの思考はぷつりと途切れて、まともな問いかけはひとつも出てこなくて、「美大って、美術の大学？」なんて、決まりきっていることを口が勝手にしゃべった。

うん、と力強くうなずかれる。

「ちさと、ごめん。あの約束、なしにしよう」

貴緒の声がわたしの名前を呼び、貴緒の声がまたわたしに謝った。情報を受け取るのにひどく時間がかかる。どうして、なんで、って胸の中はわめき声でいっぱいになる。違う。全然違う。こんなことあっていいはずない。

「ちさと……」

ふたたび呼ばれたとき、その声に心配の色がのっているのを感じたとき、貴緒の手がわたしの身体に触れようとしたとき。

(2)湧いたのは怒りだ。

どうしようもなく激しい怒りだった。

「はじめからそのつもりだったの？」

触られたくなくて身体をぐっと引く。貴緒の手が行き場を失って宙にとどまる。それがとてもとてもうっとうしい。

「守る気ないのに約束したわけね」

今はおとなたちの事情に従うしかない。いったんは離ればなれになるしかない。だけどいつか同じ大学に行って、また一緒に過ごそうって。

あの話は最初から嘘でできてたんだ。

貴緒の瞳を見る。負けないように、力をこめて見つめる。それがついにぐらぐらと揺れだすまで。

「違うよ」
貴緒は否定した。めずらしいくらい焦った口調で。
「ちさとが提案してくれてすごく嬉しかったし、あたしもそうしたいって本気で思った。でも、あれからいろんなことがあって、考えが変わったの」
信じてほしい、理解してほしいと訴えてくる目から、顔を②ソムける。やめて。理解なんてしない。絶対にしてやらない。
『いろんなこと』って、たとえば？　もっと気の合う子見つけたとか？　美術部の子と仲いいんだもんね」
こんなにばかにしたような口調で話せるんだな、わたし。はじめて知った。舌はよく回るのに、興奮して③ヒタイから汗がだらだら出てくるのに、ひとつ発音するごとに身体の芯が固まっていく。
「その子とアーティストにでもなるつもりなの？　やめときなよ、そんな夢に賭けるの。なりたいひと全員の夢が叶うわけじゃないってわかってるでしょ。いくら才能あるからって、それが……」
それが。
それが、なんなのか。
その先が続かなかった。
才能あるからって。そう、貴緒には才能がある。描くのが好きって気持ちもある。そのふたつだけで、どこまでも突き進める子なんだ。周りの意見なんて関係なく。
その〈周り〉の中に、ちっぽけなわたしが含まれている。動かしようのない事実なのに、ずっと無視してきた。気づかないふりをすればごまかせると思った。
だけどやっぱり無理だった。ほんとうのことはいつでも目の前にあって。
貴緒にとってわたしは、もう親友じゃないんでしょ。ずっと大事にしてく必要なんかないって、気づいたんでしょ。

＜　中　略　＞

この直後、ちさとは貴緒から、両親の別居で引っ越したこと、家庭の事情を知られたくなかったこと、好きなことを好きなだけやってみたいと思っていることを聞かされる。

二年間、いったい何を見てたんだろう。ずっと隣にいて。それを自分だけにゆるされた特権のように感じながら。
「いつかこうなるってわかってた。っていうか、もっと早く離れればよかったんだよ。もう壊れてたのに、続けられるふりしてたのがうちの家族のだめなとこ。これでやっと一歩進んだわけ」
口調は明るい。すがすがしいくらいに。本音を押し殺してるわけでも、強がっているわけでもなく、こういうことは起こるもんなんだよって、聞き分けのない誰かに言い聞かせるみたいに。
ただ、悲しそうな目。悲しいことを知っている目だった。貴緒は悲しかったんだ。いつでも悲しかったんだ。それでも好きなものだけは大事に守り通してきた。
やっと気づいた。もう遅い。
だって今、その貴緒に最低な態度をとったのは。
「ああ、でも。もしお父さんとお母さんがさっさと別れてたら、あたしはきっとここの学校には入らなくて」
そう言って顎をくっとあげて、閉まった門の向こう、敷地の奥を見る。レンガ色に塗られた真新しい校舎が、しんと眠って午後の太陽に照らされているのを。その横顔の輪郭も、どんどん光の中に溶けていく。
「そしたら、……」
ことばは、継ぎ足されることなく消えた。貴緒がこっちを振り向いた。
瞳にわたしが映っている。
貴緒の左手が伸びてきて、少しためらって、わたしの髪に触れた。襟足をするりと払うように。それからその手を自分の首に当てて。
「やっぱり、髪型だけ同じにしたって似てないね。でもこれ、けっこう気に入ってるんだ」

ちさと、と名前を呼ばれた。
まるでこれが最後みたいに、優しく呼ばれた。
スケッチブックを腕にかかえたまま、ジーンズを穿いた脚は、やがて駅へ向かって歩きだす。帰るために。自分の場所へ戻っていくために。ひとつの声をここに残して。
「あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ」

＜ 中 略 ＞

Ⅱ

ふと考える。
テレビのチャンネルを替えるときも、食器用の洗剤を使いすぎだと怒られるときも、呼吸を止めて限界までバスタブに沈んでいるときも、考える。
貴緒のことを。
貴緒に向かって、自分が言ったことのひどさを。
帰宅してすぐ④**ユウビン**受けを確かめる習慣はなくなった。そんなふうに期待するのは都合がよすぎると思った。
貴緒にとって、この街で暮らした日々は、楽しいばかりじゃなかった。きっと苦しいことのほうが多かった。でもそれをさとられないようにしてたんだ。そして嫌なことはぜんぶ、ここに置いていった。新しい場所で、新しい自分を生きるために。
その置いていかれた記憶の中に、わたしといた時間も収まってるんだろう。すでに終わったもの、もう思い出したくないものとして。
だけど。
別れ際、何かとても大事なことを言われた気がする……。
――髪型だけ同じにしたって似てないね。
――けっこう気に入ってるんだ。
わたしはずっと、貴緒をひとりじめしたかった。
急に引っ越しを告げて、さらっといなくなってしまった貴緒を心の隅で恨んでいた。
知らない街になじんで、仲間を見つけて、得意なことをもっともっと得意にしていく、そのための努力を惜しまない姿が圧倒的に正しく見えて、おそろしかった。
一緒にいたいと言いながら、わたしはいつも自分のことにばかり夢中だった。自分だけを特別扱いしてほしかった。わたしだって相手を特別に思ってるんだから当然だと。
それがどれほどわがままで、うぬぼれだったかに気づいたとき、すべてがひっくり返って自分が大嫌いになった。消したくなって、消えたくなって、そしたら何も残らなかった。
自分さえよければなんて考えじゃ誰からも友達とは思ってもらえない。
でも自分ってものがまったくなかったら、それはもはやわたしじゃなくて、ここにいることを誰にも気づいてもらえない。
どうしたらいいの？
そうやって助けを求めるのさえ、たぶん、甘いんだ。
わたし、わたしって、自分にかまうのもいいかげん終わりにしたい。
だって話したいのは。
ほんとうに伝えたいことは……。

＜ 中 略 ＞

Ⅲ

七月、貴緒から淡いピンクの花の絵が送られてきて、そこに「貴緒からの宿題」としてこの花の名前を教えてほしいとあった。ちさとは色々調べたが、まだ答えが見つからないままだった。急に思いついて、ちさとは大学の図書館に花の名前を調べに行く。

一〇八、一〇八。急いでそこまでめくったら、ページいっぱいに並んだ正方形の写真のひとつに、花が咲いていた。
あの絵の花。
淡いピンクの、お花紙。（※うす紙で作った花にたとえている）

脚から力が抜けそうになり、一歩さがった。後ろの本棚にせなかがぶつかる。しゃがみこむ。

目は写真に釘づけのまま、まばたきばかりしていた。二冊の本を膝に載せる。もう人差し指をしおり代わりにする必要はなかった。

トートバッグに手を入れて、硬い感触を探す。取り出してロック解除。ブラウザを画像検索モードにしたら、キーワードをふたつ打ちこむ。

〈ムクゲ　八重咲き〉

一秒もかからないで画面いっぱいに並んだ花を、呆然と見つめた。検索結果は、どこまでだってスクロールできた。薄いピンク。濃いピンク。紫、赤紫、白。二色が交じって模様みたいになったもの。どれも夏の明るい光をめいっぱい浴びて咲いている。

(3) 視界がぐにゃりと歪んだ。

スマホを持つ手がぽつっと濡れて、その水滴をただ眺めた。

ずっとふしぎだった。ＬＩＮＥのやりとりが苦手だったと言いながら、なぜ文通しようなんて誘ってくれたのか。つながり続けてくれようとしたのか。家の事情を知られたくなかったのに、友達付き合いがしんどくなっていたのに、どうして。

どうしてって、そんなの。

わたしだから。

きっとわたしだからとしかいえないものだよ。

制服と通学アイテムの絵、駅前広場の絵。そしてポニーテールの女の子の絵。たとえあのモデルが新しい友達だとして、それで何が壊れたっていうんだろう。

貴緒は絵を描いてくれた。手紙を書いて送ってくれた。

ひとつひとつ。

ぜんぶ、能瀬ちさとに宛てて。

――あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ。

――ちさと。

＜ 中 略 ＞

気づかれないうちに視線を逸らして、トートバッグに入れてきたものを取り出す。青から紫にかけてのグラデーションの封筒。白い便箋。そしてブルーブラックのペン。

便箋の一行目に相手の名前を書く。

手が止まる。考える。迷って、とりあえず何文字か書いてみる。だめだ。二重線を引いて、新しい便箋を取り出す。書く。悩む。やっぱりだめ。それでも書く。

相手を思う。

何度もなんども、思う。

貴緒へ

ひどいこと言ってごめん。

今までの手紙も、わたしが一方的なペースで送ってただけで、絵を描いてくれる貴緒の負担を気にしてなかった。絵が届くたびにうれしかったのはほんとうだけど、喜んでるだけじゃだめで、もっと考えなくちゃいけなかったのに。

貴緒が引っ越していっちゃったとき、すごくさみしかった。もう友達じゃいられなくなる気がして、不安でしょうがなかった。だけどそのあと、進路のことさんざん急かしたくせに、ちゃんと向き合おうとしなかったのはわたしのほう。

同じものを選んで、同じ場所にいれば、ずっと友達でいられるって信じこもうとしてたけど、間違ってた。

自分にとって大事なものを先に見つけられた貴緒が、正直うらやましい。だからってそれを否定するなんて、最低だった。

ごめんなさい。

もう遅いかもしれないけど、伝えたいことがあります。七月に名前のわからない薄いピンクの花を描いて送ってくれたでしょ？

どうしても突き止めたくて、大学の図書館で調べたの。

あれはたぶん、ムクゲです。木槿。その中の八重咲きっていう、花びらが重なるタイプの

品種だと思う。

本に花言葉も書かれてたよ。「信念」だって。なんか貴緒にぴったりな感じがするね。どうか正解でありますように。

一緒に過ごした時間を忘れない。だけどもし忘れても、【　　X　　】と思う。だって貴緒に出会わなかったら、友達になってなかったら、わたしは確実に、今のわたしじゃなかった。

文通しようよって言ってくれてありがとう。

ちさと

問一　‖線①～④のかたかなを漢字に直しなさい。

問二　――線(1)「その疑問は不安に変わって、次にはほとんど恐怖になった」とありますが、このときのちさとの気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　いつもは強気な貴緒が珍しく謝っているところを見て、申し訳なく感じはじめて、自分が貴緒を追いつめてしまったのだと責任を感じている。

イ　久しぶりに会う貴緒の変化に戸惑い、貴緒の進路の考え方もすっかり変わってしまっていたらどうしようと悩ましく思っている。

ウ　自分はまだ進路について考えられていないため、貴緒に失望され、嫌われてしまうのではないかと怖気づいている。

エ　進路について話しはじめた貴緒に、いきなり謝られたことで、自分にとって思わしくない展開が起こるのではないかと怯えている。

問三　――線(2)「湧いたのは怒りだ」とありますが、このときのちさとの気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　進路についての約束を貴緒に破られて深く傷ついている自分に対して、貴緒がなれなれしく触れようとしてきたことに、強い嫌悪感と不信感を抱いている。

イ　進路についてしっかりとした考えを持っている貴緒が、ちさとの進路についても気にかけるそぶりを見せてきたことに対して、余計なお世話だと感じている。

ウ　突然貴緒から進路を変えたことを聞かされ、それを飲みこめずにいたところ、貴緒から自分を気遣う声をかけられたことで、貴緒への憤りがあふれ出している。

エ　進路の話し合いを先延ばしにされたのは、貴緒には進路についての約束を守る気がはじめからなかったからだと分かり、だまされたいらだちを隠せないでいる。

問四　――線(3)「視界がぐにゃりと歪んだ」とありますが、どのようなことですか。このときのちさとの心の動きに触れながら、五十字以内で説明しなさい。

問五　作品の中では貴緒の「髪」についてのせりふが印象的に用いられています。貴緒はかつて長い髪がトレードマークだった少女です。一つ目の文章は、このことについての生徒の鑑賞文で、二つ目の文章は、鑑賞文を読んだ友人からのコメントです。後の**1**～**4**にそれぞれ答えなさい。

〈鑑賞文〉　同じ記号の空らんには、同じ内容が入る。

> **Ⅰ**で、ちさとは、約束が破られたことへのショックから、貴緒に心無いことばをぶつけてしまいました。その後、貴緒には家庭の事情があったことを知り、**Ⅱ**で、ちさとは自分の吐いてしまった心無いことばについて考え続けます。そして、今まで自分のことにばかり夢中で、自分が貴緒のことを特別扱いしているのだから、貴緒も自分を特別扱いしてくれるはずだと信じて疑わなかったちさとは、貴緒の「髪型だけ同じにしたって似てないね。」（3ページ上段）ということばを思い出します。ここでちさとは、たとえ見た目を同じにしても【　A　十字以内　】ということに気づいたのではないでしょうか。「自分」にばかりこだわるのをやめたい、それでも「自分」というものを失いたくないと、ちさとはその後も悩み続けます。

そして[Ⅲ]で、ちさとは図書館へ行き、「貴緒からの宿題」の答えを見つけ出します。そのときに「あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ。」（4ページ上段）ということばを思い出し、ちさとは貴緒の「【　B　五字　】」気持ちに気づきます。髪型を同じにしたって【　A　】けれど、それでも相手を忘れないために、大事にしていた髪を切ることもできる。自分はこれまでも貴緒から「【　B　】」ことをされていたのだと気づいたちさとは、自分もまた「【　B　】」ことをしながら手紙を書きました。文通はスマートフォンでのやりとりとは違い、【　C　二字　】や労力がかかる連絡（れんらく）手段です。しかし、だからこそ、「【　B　】」ことができます。文通にかけたたくさんの【　C　】が、二人を成長させたのではないでしょうか。

〈コメント〉

「髪」に注目するという視点がとても面白いと思いました。『自分』にばかりこだわるのをやめたい、それでも『自分』というものを失いたくない」というちさとの悩みについて、私も考えてみたいと思います。

[Ⅰ]の「気づかないふりをすればごまかせると思った」（2ページ上段）ということばからわかるように、ちさとは【　D　三十五字以内　】ことに気づかないふりをしていれば、貴緒とずっと一緒にいられると思っていましたが、そうではなかったということに気づきました。このときのちさとは、自分と貴緒は【　A　】という事実を受け入れることができていなかったと考えられます。

しかし、最後の手紙の中の「一緒に過ごした時間を忘れない。だけどもし忘れても、【　X　十五字以内　】と思う。」（5ページ上段）というちさとのことばは、たとえ目には見えなかったとしても、自分の中には貴緒と過ごした時間がたしかに存在しているということ、「今のわたし」を作ってくれたのは間違いなく貴緒との時間であることへの気づきと、「相手」との思い出を大切にしながら【　E　】という、ちさとなりの答えがあらわされているのではないでしょうか。

1【　A　】【　D　】は指定の字数で自分で考えて答えなさい。

2【　B　】【　C　】は指定の字数で本文（『文通小説』）の中から抜き出して答えなさい。

3【　E　】は自分で考えて答えなさい。

4【　X　】は指定の字数で自分で考えて答えなさい。

一

次の文章は、養老孟司『ものがわかるということ』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により、本文には一部省略があります。

また、本文をⅠ～Ⅲに区切ってあります。

Ⅰ

ヒトは脳が大きくなって、動物とは違う能力をもつようになりました。意識というはたらきです。意識はたぶん動物でももっていますが、ヒトの意識は「同じ」と「違う」を理解できます。意識は脳の中で発生する能力と思われるので、その脳に入ってくる「入力」は知覚あるいは感覚と呼ばれます。感覚は世界の違いを捉えますが、ヒトの意識はそこから「同じ」を創り出します。「同じ」という能力は、ヒトの意識の特徴と言っていいと思います。このことは『遺言。』(新潮新書)の中で詳しく説明しておきました。「同じ」という能力は交換を生み、お金を生み、相手の立場を考えるという能力を生み出します。

人間は「同じ」も「違い」もわかる。でも、猿はたぶん「違い」しかわかりません。その違いはいつ頃生まれるのか？

アメリカの科学者が、自身の子どもが生まれたとき、同じ頃に生まれたチンパンジーの子を見つけてきて一緒に育てました。

ほぼ同時期に生まれたその子どもとチンパンジーの発育を比較したところ、生後三年までは、なんとチンパンジーの能力のほうが上でした。特に運動能力は優っています。

ところが四歳から五歳になると、人の発育が急に進みます。チンパンジーは身体は発育するのですが、知能はそれ以上発達しないのです。

おそらく三歳から五歳の間に、人とチンパンジーを分ける何かが起こるのでしょう。

それを確かめた実験もあります。

参加するのは三歳児と五歳児。舞台に箱Aと箱Bを用意します。

そこにお姉さんが登場します。箱Aに人形を入れ、箱にふたをして舞台から去ります。

次に、お母さんが現れます。箱Aに入っている人形を取り出し、箱Bに移します。そして、箱Bにふたをして立ち去ります。

再びお姉さんが舞台に現れます。

そこで、舞台を見ていた三歳児と五歳児に、研究者が質問します。

「お姉さんが開けるのは、どちらの箱？」

三歳児は「箱B」と答えます。自分はお母さんが人形を移したことを知っているため、お姉さんも箱Bを開けると考えてしまいます。

一方、五歳児は「箱A」と答えます。なぜならお姉さんは、お母さんが人形を移したのを見ていないからです。もちろんこちらが正解です。

三歳児と五歳児は、なぜ違った答えをしたのでしょう？

五歳児は「自分がお姉さんの立場だったら」と考えました。お姉さんと自分を交換して考えられるのです。

三歳児には「お姉さんの立場に立つ」ということができません。「人形は箱Bに入っている」ということを自分が知っているように、お姉さんも知っていると思ってしまうのです。

この他者の心を理解するというはたらきを(1)「心の理論」と呼びます。発達心理学では「心を読む」と表現しますが、私は「交換する」と考えます。必ずしも心を読む必要はなく、「相手の立場だったら」と自分が考えればいいのです。

この、自分と相手を交換するというはたらきも人間だけのものです。

Ⅱ

心の理論が示すように、人間の脳は、できるだけ多くの人に共通の了解事項を広げていくように発展してきました。人間の脳は、個人間の差異を無視して、同じにしよう、同じにしようとする性質をもっています。だから、言語から抽出された論理は、圧倒的な①**セットク**性をもちます。論理に反することを、脳はなかなか受け付けないのです。

私たちは生まれたときから、言葉に囲まれて育ちます。生まれたときには、すでに言葉がある。だから言葉を覚えていくということは、周りにある言葉に脳を適応させていくことにほかなりません。

言葉は自分の外側にあるものです。私が死んでも言葉がなくなるわけではありません。脳が演算装置だとすると、言葉は外部メモリ、つまり記憶装置です。そこには文字によって膨大な記憶が蓄えられています。

言葉だけではありません。言葉よりもう少し広い概念が「記号」です。絵画や映像、音楽は言葉ではありませんが、人に何かを伝える記号です。

記号の特徴は、不変性をもっていることです。だから違うものを「同じ」にできる。「黄色」という言葉は私が死のうが残り続けます。

でも、現実は変わり続けています。こんなことは昔の人はよく知っていました。「諸行無常」も「万物は流転する」も、変わり続ける現実を言い表した言葉です。

しかしいまや、記号が幅を利かせる世界になりました。ⓐ記号が支配する社会のことを「情報社会」と言います。記号や情報は動きや変化を止めるのが得意中の得意です。

現実は②**センペンバンカ**して、私たち自身も同じ状態を二度と繰り返さない存在なのに、情報が優先する社会では、不変である記号のほうがリアリティをもち、絶えず変化していく私たちのほうがリアリティを失っていくという現象が起こります。

そのことを指して私が創った言葉が「ⓑ脳化社会」という言葉です。

情報社会と言うと、ⓒ絶えず情報が新しくなっていく、変化の激しい社会をイメージする人が多いかもしれません。しかし、私の捉え方はまったく逆です。情報は動かないけれど、人間は変化する。これを理解するために、私がよくもち出すのがビデオ映画の例です。

たとえば同じビデオ映画を、二日間で十回見ることを強制されたとしましょう。一種類の映画を二日間にわたって、一日五回、続けて十回見る。そうすると、どんなことが起こるでしょうか。

一回目では画面はどんどん変わって、音楽もドラマティックに流れていく。映像は動いていると思うでしょう。二回目、三回目あたりは、一度目で見逃した、新しい発見がいろいろあるかもしれません。そして「もっと、こういうふうにしたら」と、見方も玄人っぽくなってきます。

しかし、四回目、五回目になると、だんだん退屈になるシーンが増えてくる。六、七回目ではもう見続けるのが耐えがたい。「なぜ同じものを何度も見なきゃいけないんだ」と、怒る人も出てくるでしょう。

ここに至ってわかるはずです。映画はまったく変わらない。一回目から七回目まで、ずっと同じです。では、何が変わったのか。見ている本人です。人間は一回目、二回目から七回目まで、同じ状態で見ることはできません。

ここまで書けば、もうおわかりでしょう。情報と現実の人間との根本的な違いは、情報はいっさい変わらないけれど、人間はどんどん変わっていくということです。

(2)しかし、人間がそうやって毎日、毎日変わっていくことに対して、現代人はあまり実感がもてません。今日は昨日の続きで、明日は今日の続きだと思っている。そういう感覚がどんどん強くなってくるのが、いわゆる情報社会なのです。

どうしてか。現代社会は、ⓓ「a＝b」という「同じ」が世界を埋め尽くしている社会だからです。記号や情報は作った瞬間に止まってしまうのです。

テレビだろうが動画だろうが、映された時点で変わらないものになる。それを見ている人間は、本当は変わり続けています。でも、「自分が変わっていくという実感」をなかなかもつことができない。それは、私たちを取り囲む事物が、情報や記号で埋め尽くされているからです。

(3)困ったことに、情報や記号は一見動いているように見えて、実際は動いていない。だから余計に、人間は自分の変化を感じ取りにくくなるのです。

＜ 中 略 ＞

Ⅲ

対人の世界でも対物の世界でも、多様な場所に身を置けば、何事も自分の思い通りにならないことがわかります。世の中には思い通りにならないことがあることを知る。それが寛容の始まりです。

自分も変わっているし、相手も変わっている。変だと思ったら、それは自分が変なのか、相手が変なのか、どちらかです。だけどいまの人たちは「相手が変だ」と言うほうが多い気がします。自分は変わらないと思っているからです。

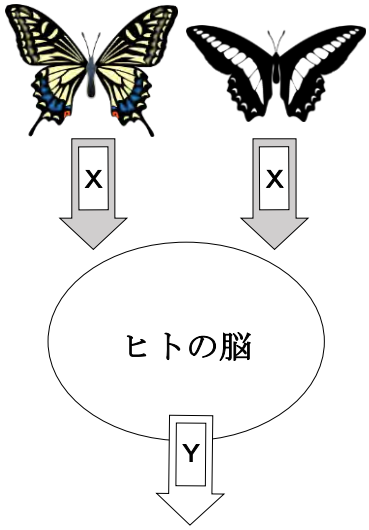
それを「不寛容」と言います。「何かおかしい。変なのは俺じゃない、こいつだ」となって、相手を排除しようとする。不寛容の極みです。もしかしたら、変なのは自分かもしれない。それを忘れて、(4)自分のモノサシを固定化した瞬間、人は不寛容になります。

寛容になるためには、思い通りにいかないことを受け入れたうえで、少しずつ状況を変えていくしかありません。それには自分だって変わらなきゃいけない。そうやって人間は「努力・辛抱・根性」の方法を学んでいくのです。

思い通りにならない人や物を前にしたとき、人間の本当の意味での体力や感覚の強さが試されるのです。

問一 ‖線①・②のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 次の図は、文章Ⅰの第一段落をもとに、チョウを見たときの脳の働きをまとめたものです。矢印の中の X・Y に入ることばとして適切なものを、文章Ⅰの第一段落（「ヒトは……生み出します。」）の中から、それぞれ漢字二字で抜き出しなさい。



「チョウだ！」

問三 ――線(1)「心の理論」とはどのようなことですか。「意識」ということばを用いて説明しなさい。

問四 ～～線ⓐ～ⓓについて、本文中での意味内容から分類したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。（｛　＝　｝は同内容であることを表す）

ア ｛ⓐ＝ⓑ｝と｛ⓒ＝ⓓ｝で内容が異なる。
イ ｛ⓐ｝と｛ⓑ＝ⓒ＝ⓓ｝で内容が異なる。
ウ ｛ⓐ＝ⓑ＝ⓓ｝と｛ⓒ｝で内容が異なる。
エ ｛ⓐ｝と｛ⓑ＝ⓒ｝と｛ⓓ｝で内容が異なる。
オ ⓐ～ⓓは、すべて異なる内容である。

問五 ――線(2)「人間がそうやって毎日、毎日変わっていくことに対して、現代人はあまり実感がもてません」とありますが、これについて述べた次の文章を読み、後の**1**～**4**に答えなさい。

養老孟司『遺言。』にはこのような記述がある。

現代生活は感覚が働かないように、できるだけ努める。（中略）
山の中を歩いてごらんなさい。地面はデコボコ、木の根や草がある。雨が降ったらぬかるむ。風が吹き、いつの間にか日が傾き、明るさが変化する。小鳥がさえずり、小川が流れ、それが森に反響して、じつにさまざまな音がする。つまり都市の生活は、そうした感覚入力をできるだけ遮断する。（中略）
感覚所与を意味のあるものに限定し、いわば最小限にして、世界を意味で満たす。それがヒトの世界、文明世界、都市社会である。それを人々は自然がないと表現する。そこには花鳥風月がない。でも自然はもともとあるもので、あるものはしょうがないのである。（中略）
すべてのものに意味がある。都会人が暗黙にそう思うのは当然である。なぜなら周囲に意味のあるものしか置かないからである。しかもそれを日がな一日（一日中）、

見続けているのだから。世界は意味で満たされてしまう。それに慣れ切った人たちには、やがて意味のないものの存在を許さない、というやはり暗黙の思いが生じてくる。

このことをふまえると、Ⅱの議論がより分かりやすくなる。つまり、現代生活の中では【A ア 同じ／イ 違い】を捉える「感覚」が働かないようになっている。そのため、我々は［　　］存在であることを忘れてしまう。

さらに、Ⅲをふまえると、この議論への理解がより一層深まるだろう。現代の人間は［　　］存在であることを忘れてしまっているため、何か違和感を覚えたときに、相手を排除して【B ア 同じ／イ 違い】を守ろうとしてしまう。

【C ア 同じ／イ 違い】に囲まれた環境で過ごしているせいで、【D ア 変化する／イ 変化しない】ことが認められなくなっているのだ。筆者は、このことを指して、「【 E 】」と言っている。

1 ～～～線「周囲に意味のあるものしか置かない」とは、どのようなことですか。身の回りの具体例を挙げて説明しなさい。

2 ［　　］(二か所あるが、同じ内容が入る)に入る内容を、自分で考えて答えなさい。

3 【 A 】～【 D 】に入ることばとして適切なものを**ア**・**イ**から選び、記号で答えなさい。

4 【 E 】に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寛容　**イ** 不寛容　**ウ** 努力・辛抱・根性
エ 脳化社会　**オ** 諸行無常　**カ** 記号

問六 ――線**(3)**「困ったことに、情報や記号は一見動いているように見えて、実際は動いていない」とありますが、これにあてはまる具体例として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ニュース番組は毎日更新されるため、新しい情報を発信しているように見えるが、情報発信の方法は、特に変わっていない。
イ 一つの音楽を何回か聴くと、その時どきで新しい感情になるので、自分自身が変化しているように思ってしまうが、実際は変わっていない。
ウ 広告には、映像や、写真によるものなどが存在する。映像の方が好まれがちだが、実際には、動きのない写真の方が情報を発信するのに長けている。
エ 『源氏物語』は、人によって解釈の仕方は違うことがあるものの、実際には、文章自体は変化していない。

問七 ――線**(4)**「自分のモノサシを固定化」とありますが、自分をどのように見ると、「モノサシを固定化」するようになってしまうのですか。答えなさい。

問八 次の**ア**～**エ**について、文章Ⅰ～Ⅲの説明としてあてはまるものには **○** を、そうではないものには **×** を、それぞれ答えなさい。

ア 人は五歳になると、知能が急速に発達し、「違い」を認識する能力を獲得するため、他者を思いやることができるようになる。
イ 人間の脳は、できるかぎり多くの個人間の差異をつくり、個性を編み出すために発展してきたため、自分と似た人に出会った際には、脳が受けつけなくなってしまう。
ウ 言葉より少し広い概念である記号の特徴としては、老いていく人間とは違い、記号はいつまでも変わらない。
エ 人間は、めまぐるしく変化する情報に囲まれているため、自分は成長しているのだと錯覚してしまう。

二〇二四年度　国語解答用紙

試験会場の机の上にある
シールを1枚ここに貼ります

242110

受験番号				

氏名

2024K-①

一　問一
①
②
③
④

問二

問三

問四

問五
A
D
1
2
B
C
3
E
4
X

問六

問七

問八
ア
イ
ウ
エ

二　問一
①
②

問二
X
Y

問三

問四